

骨董集

卷之二

1545
2



編中之卷



○名古屋帯日

江戸

醒と輯

文祿前後より寛永の頃までの古画と云ふ男女ともに絲と絹と一繩と似たる
 両より細くつけたるといくべきかまなりて帯に志する体ありきなり其色の
 白あり紅あり青黄赤など殊ゆて彩色と云ふあり按ん是れいゆる名古屋
 帯ありて昔肥前の名古屋よく唐糸とて組するゆふ名古屋帯と云ふ
 又組帯ともいひしと或人いふ**和名鈔**腰帶類云**緋帯**和名加良織絲為帶也
 とあり加良久美の韓組と名古屋帯は此韓組帯の遺制ふやあり又**源氏**
 梅枝の巻ふ「たんのつゝみひも」といふことありて其巻物の紐をいふ
和名鈔服玩具云四聲字苑**緋青而黄也**のいふ文祿前後は古画ふ青黄
 赤かといふらるる組帯あり是則緋れかといふ帯なりと云ふ

今も——の僧九帯として式正のものとして——の組の帯は僧家でも用ひ
なると既ふ利休の像と画くは組の上帯と道服の上小帯と
寛文六年瓢水子浅井了意作元禄十一年刻 卷之二五「天正年中越前敦賀金銀を
かみ持する商人一人は男子と持するあり其隣に住有徳なる商人の娘と娶て妻と
すと云ひ約とありそは——に——真紅に撃手帯とそは娘よもつ——
つ——按これ原剪燈新話の金鳳釵記と翻案したる物語なれども金鳳釵
真紅撃手帯につらうて天正年中これ——たる當時此帯とりて用ひたる事寛文乃
比をもいひつゝたるゆゑあつたれを一統に依り

○火燧 一

火燧といふは近古いでたるものなり火燧のなるは以前に尻掛け火鉢を足を煖
む——古き繪卷其体と云ひけりありあつたは番なれば左ふ摹出たり

下学集 火燧は名目と云ひ尺素往來小竹煖生炭木床を煖ては風をこぼす

て火燧の——を文安文明乃比をいひ火燧といふあり——

饅頭屋節用

文亀中初刻 詞花堂藏本

火燧火踏つれづれと見るとこれとを按よひし火燧の文明

以後ふそれ——もなま——○今も唐土に此方火燧の如く炉上は煖とてを

覆て——も **清俗紀聞** 冬は手炉と用ひ極寒中なを手足冷る時脚炉

火とて灰と覆ひ椅子の前或は睡床の前は並て足と其上は並て温る云々 地炉

石炉といひ此方の巨燧の横は地と拵て置りありこれ南方温暖は土地

用ひ——も **行厨集** 煖手者曰手炉煖足者曰足炉 **清俗紀聞** 小

炉は是なるべ **或は按** 火燧は地火炉のなりなり **欽地火炉** **宇治拾遺** 小

又 **奥州後三年記** 永保の比陸奥に地火炉ついでとありありし **成記** 此

いしとあり此地火炉は制らりて火炉と名を火炉と名をいひは様をつらと

やが——のあり **櫓** と名づけられしを戦国の時れ制しをある人其居れ

櫓形に似たるゆゑに名をいひしなり

○名古屋帶古圖
 按るにこれ寛永以前の
 古画なる當時の童女の
 髪は如きまき髪に
 ゆふれを
 名あり

○衣服の繪落よそ
 繁華の足袋とよそ
 二百年前の古風
 眼前の如し
 ○此時代の繪とあるに
 婦女の衣服はよそ
 色もはるかに
 かわらぬと
 威儀のたゞり

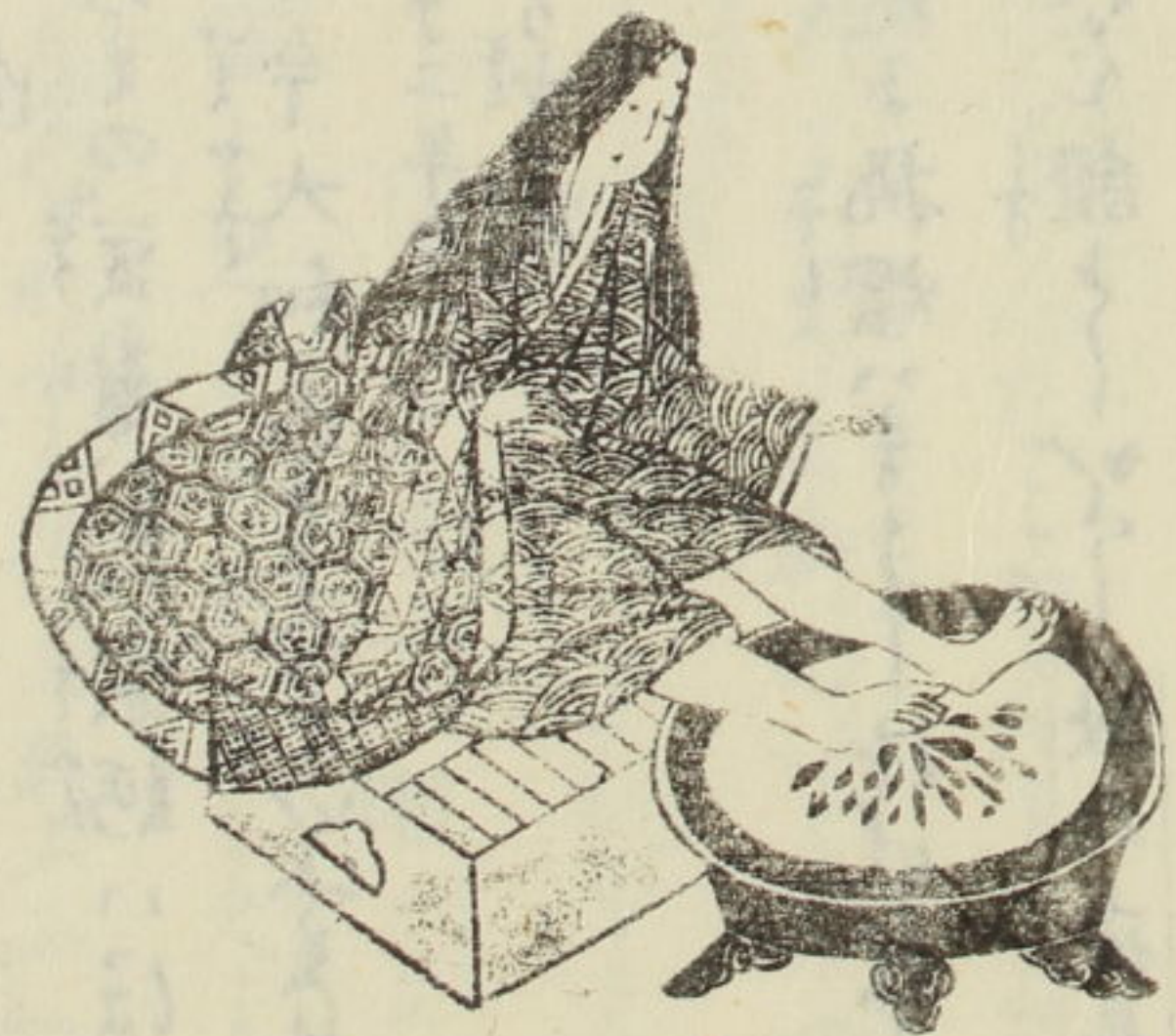


曳尾庵所藏

○寛永二十年印本

信じてはこれの如き
 冬は火のよそ
 履子の蒲團と打
 又寛永より明曆の
 比の俳諧の句
 火焼くよそ
 舟ひれ様と
 舟の櫓の字

○文明以前火焼
 多し時代火鉢よそ
 正し何とて
 窓に
 載たり
 詞花堂藏



○かじやき おかき

鰻鱺は樺焼へ其焼たる色紅黒なり樺は皮小似たるゆゑ其名なりと諸書よ
 い不替の説なり新猿樂記小香疾大根といふ名是れなりとて香乃疾く
 他は鼻ふ入れ謂なるは鰻鱺は香疾よく相当なる名かり鰻鱺と焼く

筆の
下は
筆の
筆の
筆の
筆の
筆の
筆の
筆の
筆の
筆の

切入りりり諸書と参考するの **文安** 五 下学集 燈籠 行燈 挑燈

筆挑燈 支安元年此書なり **宝徳** 三 七十一番職人歌合 小辰君と男續松を掛

行燈の 當時も挑燈と用ひられたり **長禄** 三 長禄 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

當時 のり **康正** 二 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

挑燈の名目 文明以前ハ用ひられたり **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

頭屋節用 挑燈名目 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

永正 七 或古記 大永三年の条 **門** 二 二つの 一 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

天文 三 元太記 天文十九年の条 **中間** 二 挑燈 一 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

指物 と用ひられたり **永禄** 五 永禄 五 當時 ハ既ニ挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

甲陽軍鑑 卷之一 永禄元年 **不断** 不可燃 挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

の条 軍用 **結付** 馬負 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

小一 **續松** り **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

元正 三 或古説 **永禄** 五 永禄 五 當時 ハ既ニ挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

文禄 四 慶長 九 好古日録 俗に云箱挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

編たり板と用ひる慶長以後 **天正** 一 天正 一 前挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

制 左ふり **元正** 三 或古説 **永禄** 五 永禄 五 當時 ハ既ニ挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

寛永 十 正保 四 慶安 四 吾吟我集 未得著 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

草紙 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

手挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

箱挑燈 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

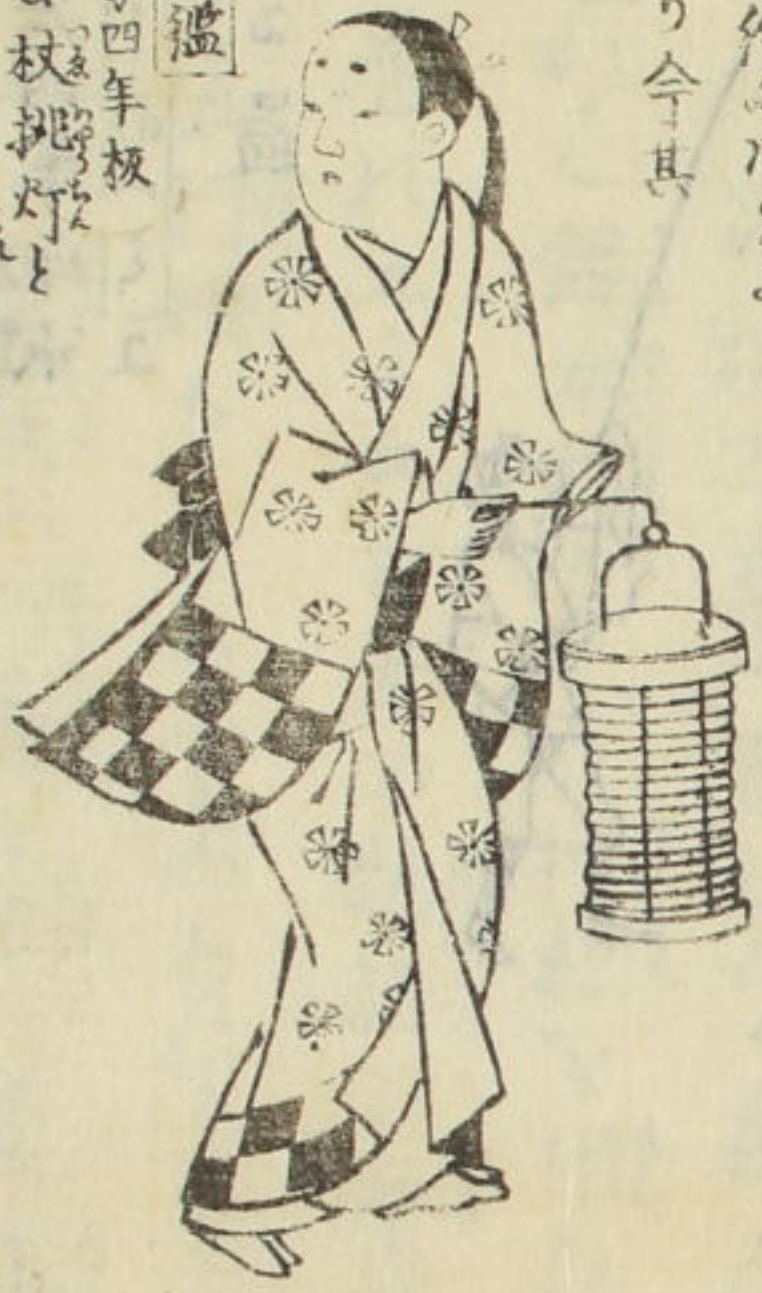
保女 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

保女 **長禄** 三 長禄 三 寛正 六 文正 一 應仁 二 文明 六 尺素性来

○羽列籠挑燈圖
 羽列籠今より水用ゆこれ
 天正以前の挑灯は古製と
 ぎし物より形の異同大小も
 り多し一は平を得る
 ものと雪のふ道に載る
 の成臨しとより
 古製は今に
 の心はわたり

○元禄八年
 漆繪百人一首
 所載

○延宝の比
 元禄未だ未だの如く
 柄はたる箱挑灯とあり
 當時は今より
 一二と
 西鶴大鑑
 貞享四年板
 巻之二は杖挑灯と
 り名は是なり

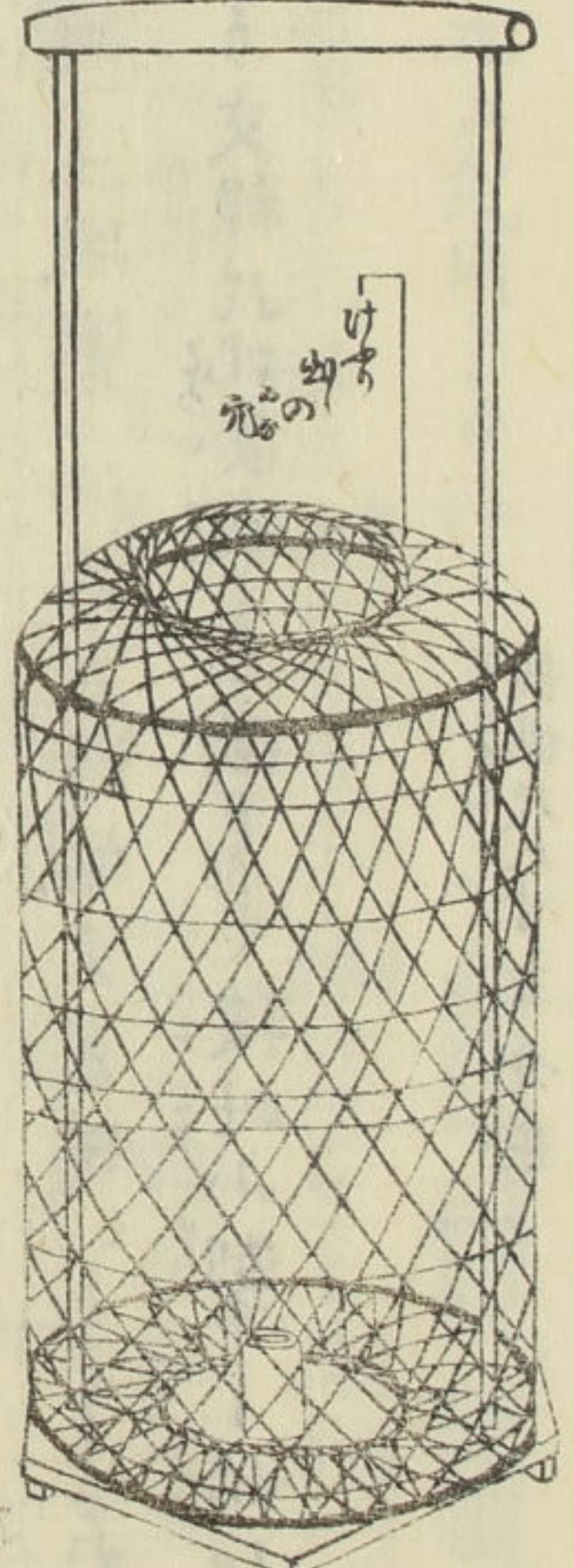


○寛文七年印本
 水鳥記
 所載



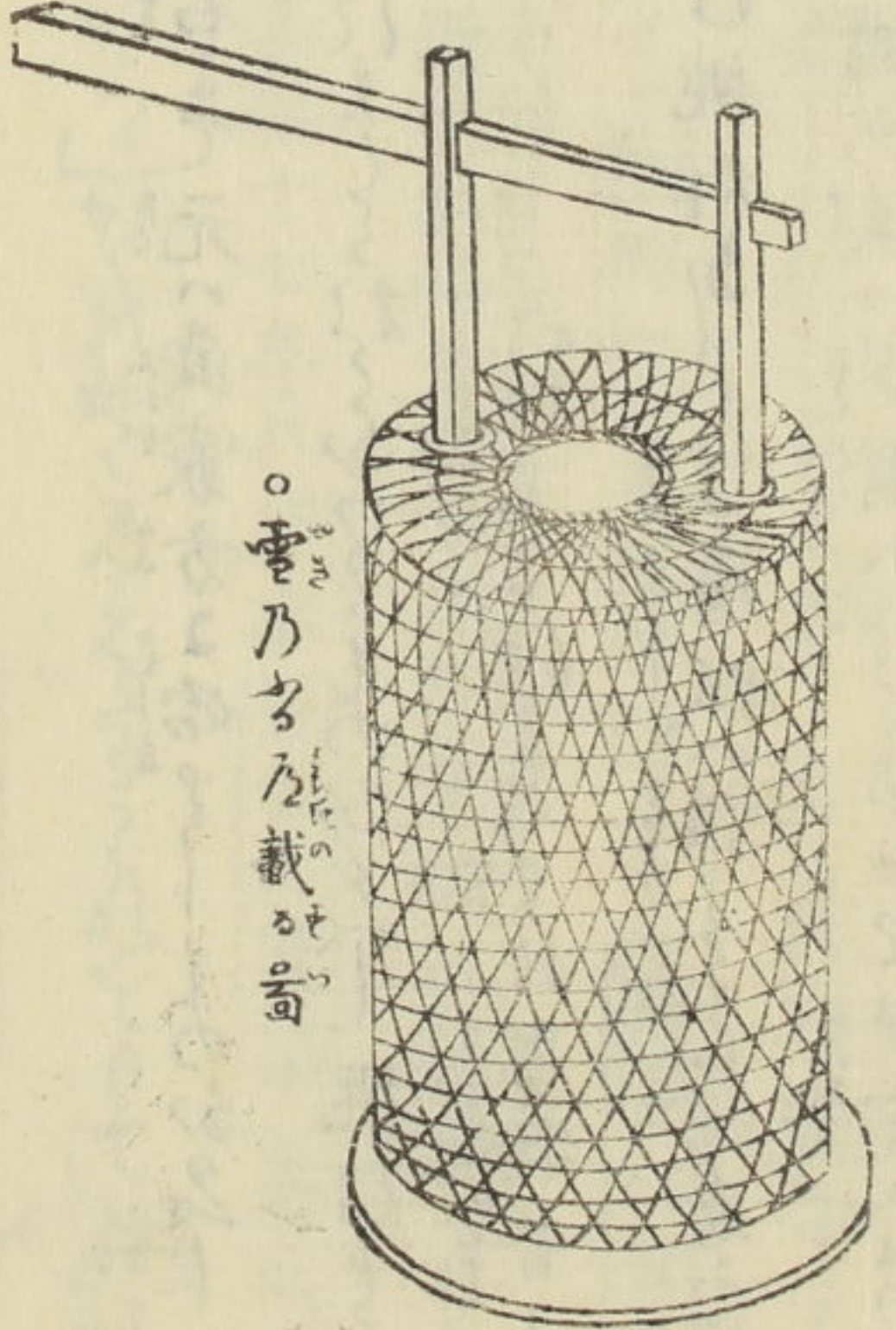
○當時の如く
 棒乃たる箱挑灯
 所載

○總高曲尺二尺寸余
 籠高一尺二寸余
 表紙と紙と糊て
 用



箱六板臺

○籠と上へわけ火とせしむ
 やうにたる甚だ板は竹は筒と
 立て右の松やうらうそくと
 なる料とん



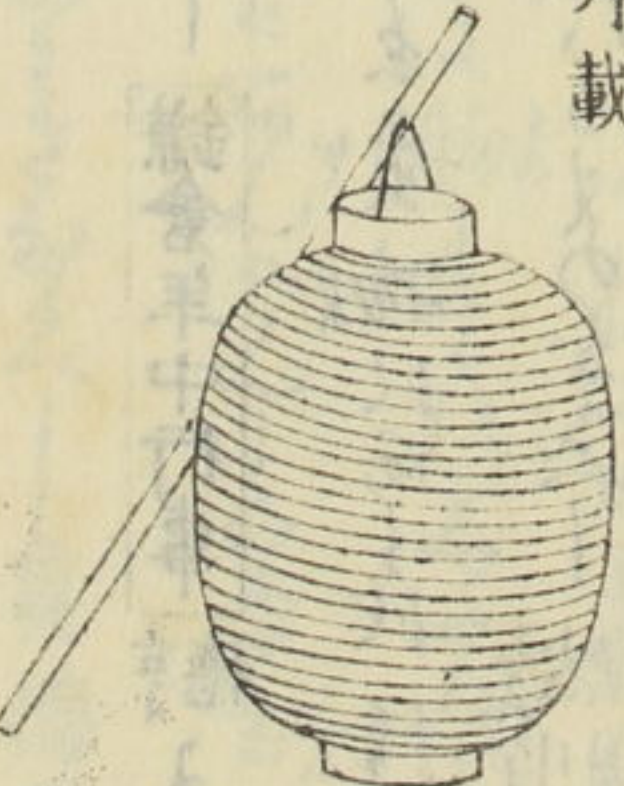
○雪乃ちる載り籠

○寛文六年印本
 訓蒙呂果
 所載

○元禄五年印本
 胸箒用
 所載



○元禄十五年印本
 諸藝大平記
 此箇の
 ○當時の如く
 棒乃たる箱挑灯とあり
 當時は今より
 一二と



今俗にち挑灯と
 ありはに似たり

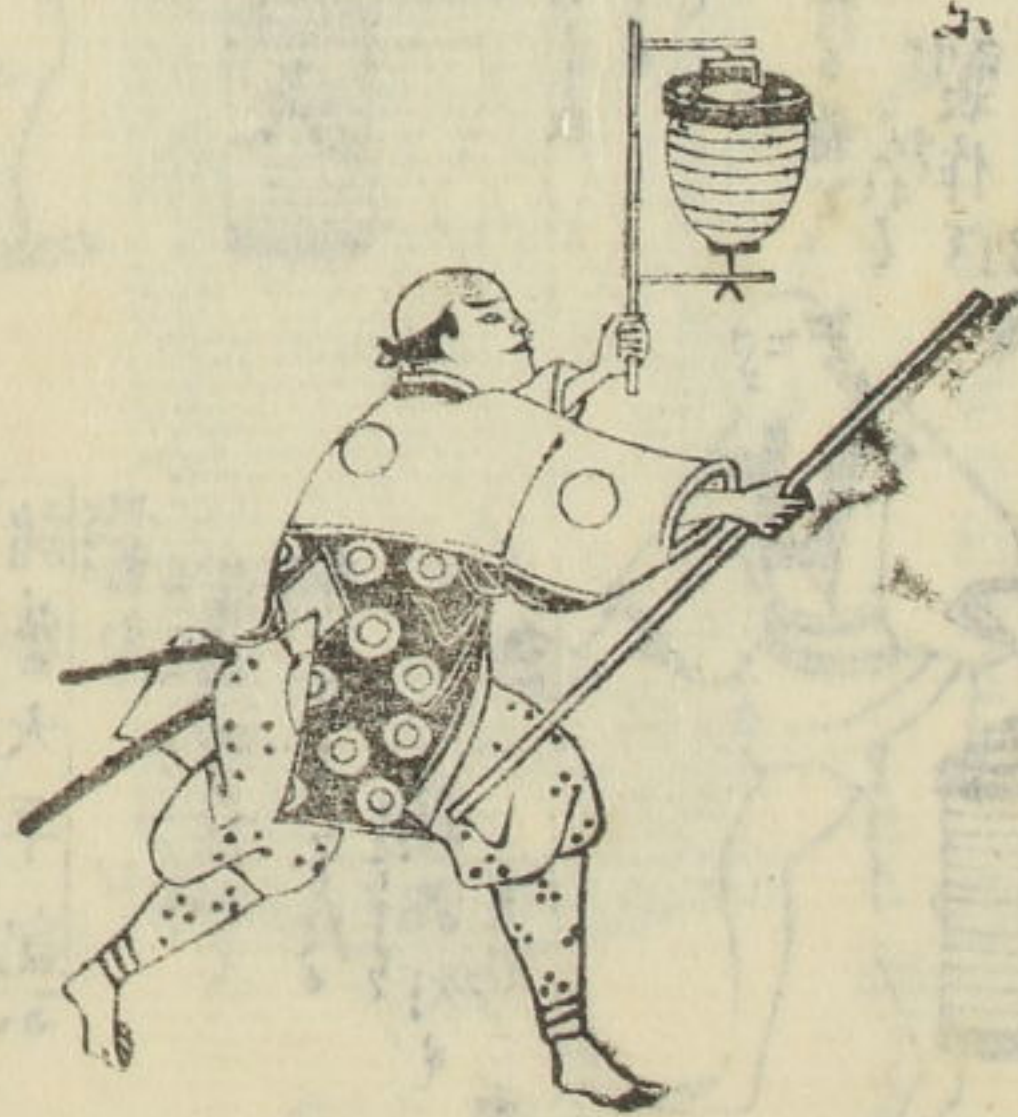
○万治四年印
載の音



○行燈 五

○宝永五年印
諸士百家記

此の音あり
如き挑り
用ひ



行燈は始詳多に下学集 文燈箒行燈挑燈 つかうべし 鎌倉年中行事 徳の行列に續
松行燈と持せしるゝとんそり 按る行燈は元家内よとま置物にのり松の便り
とゆふ火よりひいて風よせえ持りく為に造出たるものなり 然則字義

骨董上編中八

りり民家、端近く風よせえ火の便り 後小燈臺のりり
用ひたるものなり 永正御撰何曾のりりは僧の寮の物にこれとんそり古言なり
何んぞと解何曾のりりは佛の寮の物にこれとんそり古言なり
下学集 小行燈とゆふ火のりり後小上木とる時乃とんそりなり 貞徳乃御傘
小行燈とゆふ火のりり

玄峰集

依見鐘木町松のりり世とゆふり
仍燃て来る夜なる夜月

嵐雪

のりりの鐘木町あり、續松と用ひ元禄此のりり行燈よとんそりなり
翁草 卷れ五よ古老の物語に今世にのりり調度なり 今皆ある事なり 昔と路次
なわりのりり行燈なるものあり 今如く如く手の中はのりり近きなり 昔と路次
行燈は如く底板の燈臺と置たる風速州のりり行燈を死せし角なり 行燈は燈
臺と中にのりり始なり 此説は如く行燈は古製のりり今茶人の用る廬地行燈なり

物とてよく知らるゝ其製作は歩く不便にされ元家内にとりて造出する
 元禄二年印本
 本朝櫻陰比事
 作載
 挑灯れくひのり
 遵生八牋 小有柄曰行燈用以秉燭と有り唐土に行燈は此方乃



今茶人此用る
 唐土に造出する
 此方乃

○笠に下ふ布と垂 六

秋齋問語 宝曆三年印本
 卷之二 小亭禄二年此古画と載る左に如し今案に主人は女
 被衣やれぬふ市女笠と云ふるをばつひの女下女ハ手ぬぐひのてん一ひり此
 布と頭はくく其くふ笠とひりたり 職人歌合の女乃頭はまく布と別る

骨董上編 中九

秋齋問語
 所載亭禄
 二年古画

亭禄二年と今
 文化十年より
 此を二百八十五
 年此昔から當時
 の女は別体
 なり此畫密画
 といふこと
 カンバ

このふ所 假名を
 秋齋問語乃
 まこと幕
 たん

一向ノ下女ノテイ
 ナルヘシ袋ヲモタ
 スルハ古風ノ一之

ソハツカハスル女トミヘ
 タリ下女ハカミヲサゲ
 ソハツカヘテイハカミヲ
 サクルトイヘトモカ
 ツラハカケタリ

主人ノテイ 今ア
 カツキテイノモノヲキ
 タルカウヘニキタルハ大
 ウチキノテイトミヘタリ
 市女笠ハカミノソコ子
 サルタメカ

寛永時代古画
此画と載り



古画と
載り

京山模写

香花園藏本
寛文二年印本

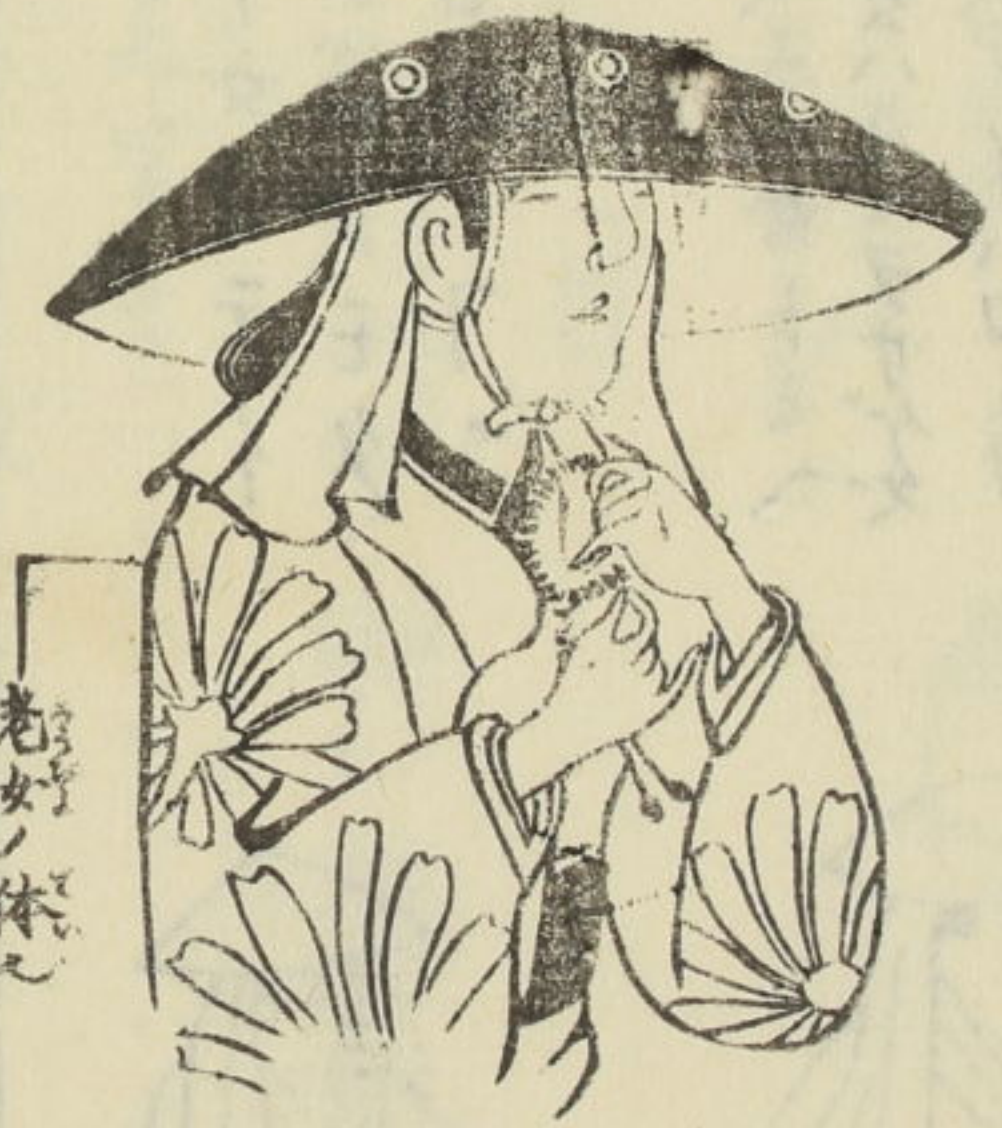
要石
竹載



詞花堂藏本
天和四年印本
斐川の傍
此画あり

これ等古画と参考すも
寛永寛文天和れ比をも
いふ布とたれて

此画は寛永時代の古画と
載り
寛永寛文天和れ比をも
いふ布とたれて



老女の体

骨董上編中十

○女の編笠塗笠 七

婦女に編笠塗笠とあり一いふ古にあり古に繪巻をいふはもと古に近き
女に面とありいと道と行ふは編笠と載る又覆面なるは賤れ女
面とありあり歩行いふは寛文比に女に編笠塗笠と少くして
面とありあり歩行いふは寛文二年の印本江戸名所記かどの繪とて考かりは
獨語ふ云江戸に婦女外に出る昔はさきさきして黒き緒とて改面とて目くら
わづらふ其後緒とて改面とてさき宝永にさきをさきなりとて礼の内則
女子出門必擁蔽其面とてさきさきのつらつらなり

毛吹草 維舟撰 正保四年刻

花笠とぬり笠とありとてさきさきなり

寛山集 慶安四年 令徳撰 明暦二年刻

紫乃 正保四年 一とてさきさきなり

良保
按さしは古にさきさきなりとて
いふはもと古に近き

○桔梗笠

天子草 寛永十年刻

毛吹草 正保四年刻

玉海集 明曆二年刻

口舌似草 明曆二年刻

賜忘草 明曆三年刻

歌後集 寛文五年撰

以上六部在歌堂藏本

右に如くするに俳諧に句集に桔梗笠と云ふ句あるに當時の如くは笠あり

と云ふ句ありは俳諧に句集に桔梗笠と云ふ句ありは左の古圖と得て其形を知ぬ。又

山井 慶安元年刻 小も 桔梗笠と云ふ句ありは左の古圖と得て其形を知ぬ。又

今も羽刈秋田船越天王比船祭に左に圖に如き笠と云ふは

桔梗笠に如きものあり

徳元

吉政

喜雅

作者不知

蝶こ子

作者不知

桔梗笠に如きものあり

桔梗笠古圖



貞享の比の繪に此苗有り 大神樂打の体也

几禰の比の繪に此苗有り

天和貞享の比に幼花乃繪卷の
うらふ此苗と載たり 蓋の青黄赤
一箇ありんいらざり



大神樂打の少年の体也



此二人 美少年乃 舞子の体也

○浮世袋再考 九

沙金袋

山本西武撰
明曆五治ノ此刻

塵れく浮世袋や年一乃其

要西

此句より考へるに浮世袋ハ勝れたるひもた

秋齋問語云昔太刀三つ付

火打袋と三角は絶やあふ紙子と火打の名有り

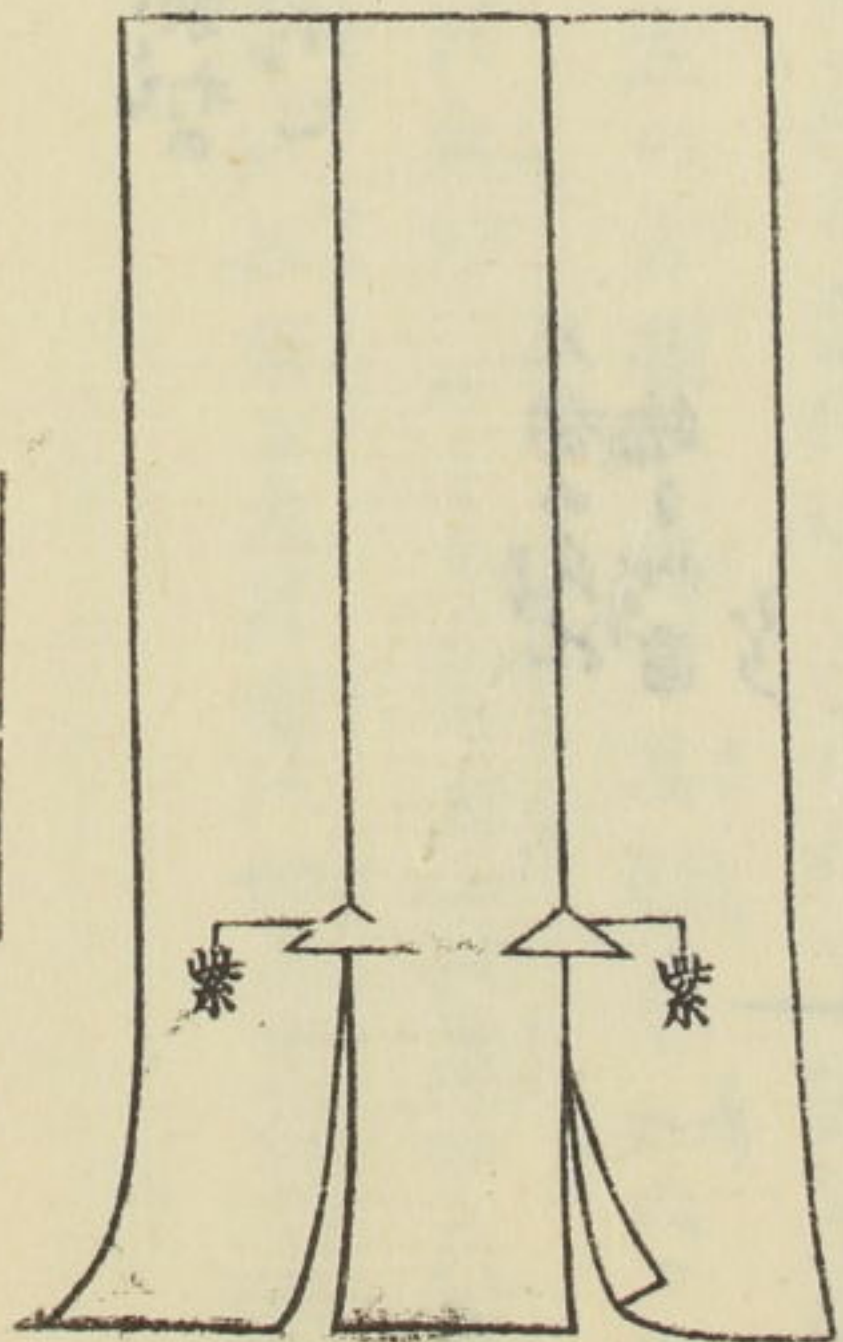
此説ふれと三角は絶やあふ火打袋を

何れも浮世袋も三角は絶やあふ火打袋は遺制を

卯子酒 宝永六年 卷之三 昔九軒町の繁昌一

後ハ去るを稱一かな

○昔世袋の布着は浮世袋とつけりといふハ
此考れ下々のいふまに絶やあふ紙子と三角は形は絶や
つけりたる浮世袋は形は絶やあふ紙子といふまに
右重なるは絶やあふ紙子のいふまに絶やあふ紙子といふまに
絶やあふ紙子のいふまに絶やあふ紙子といふまに



骨董上編中十四

本朝俗語志

延享四年

卷之三

今頃城町此燈籠

○又童女此計業は絶やあふ紙子といふまに絶やあふ紙子といふまに

○又於女ふれりたる浮世袋は勝れたるひもた

慶安二年序は文小一何れも絶やあふ紙子といふまに

如く

新續犬筑波

七々 ほまじり

正信

俳諧糸屑

元禄七年

卷之三

今頃城町此燈籠

○又童女此計業は絶やあふ紙子といふまに絶やあふ紙子といふまに

○又於女ふれりたる浮世袋は勝れたるひもた

慶安二年序は文小一何れも絶やあふ紙子といふまに

如く

新續犬筑波

七々 ほまじり

正信

同三尊来迎佛

此は黄土輪後光丹蓮華丹緑青
雲朱墨寸尺わび林前よか。

尚志堂藏



右に諸士百家記は見えざる荒閑と云ふ
狂歌せし三尊像も此よりいふべし

心清
指法

丹

竹

元禄三年印本

東海道分間繪圖所載

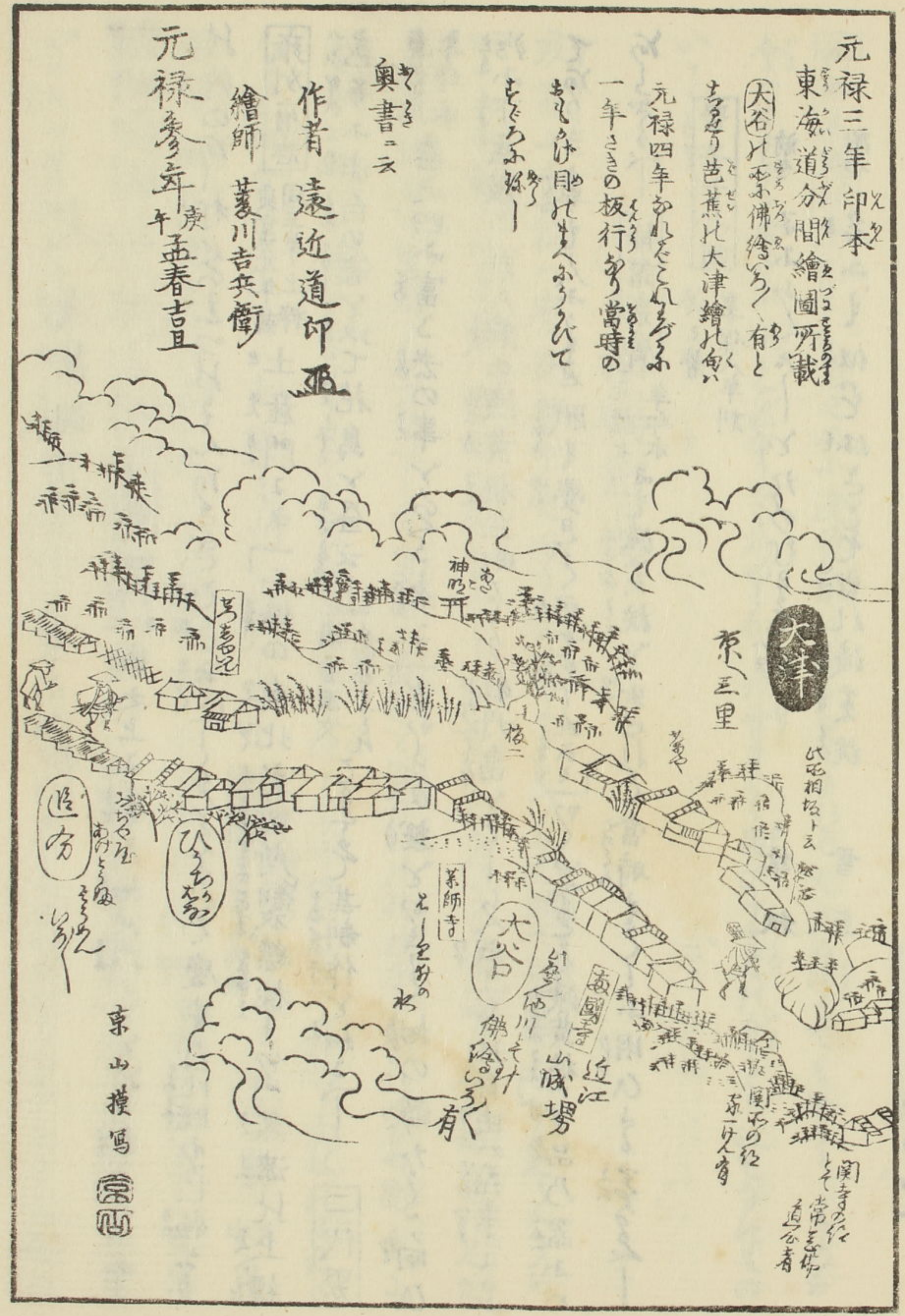
(大谷)に平佛繪あり有と
ちるなり芭蕉比大津繪比
元禄四年おれとこれいふ
一年さきの板行あり當時の
おしひ目れも人ふうへて
まゝらふぞし

奥書ニ云

作者 遠近道印

繪師 菱川吉兵衛

元禄参年庚午孟春吉旦



東山横馬

骨董上編 中十七

硯蓋と称する原とうり物あり

○二足三文 干四

今物れ價の安さ成二足三文と云ふ語元金剛れ價よりせり
刻梓の年号ありて元寛永の 下之巻よ「金剛二そく三文と云ふ」と云く「一の巻
狂歌と載り金剛ハ草履れと云ひたり。蘭金剛葉金剛板金剛種あり

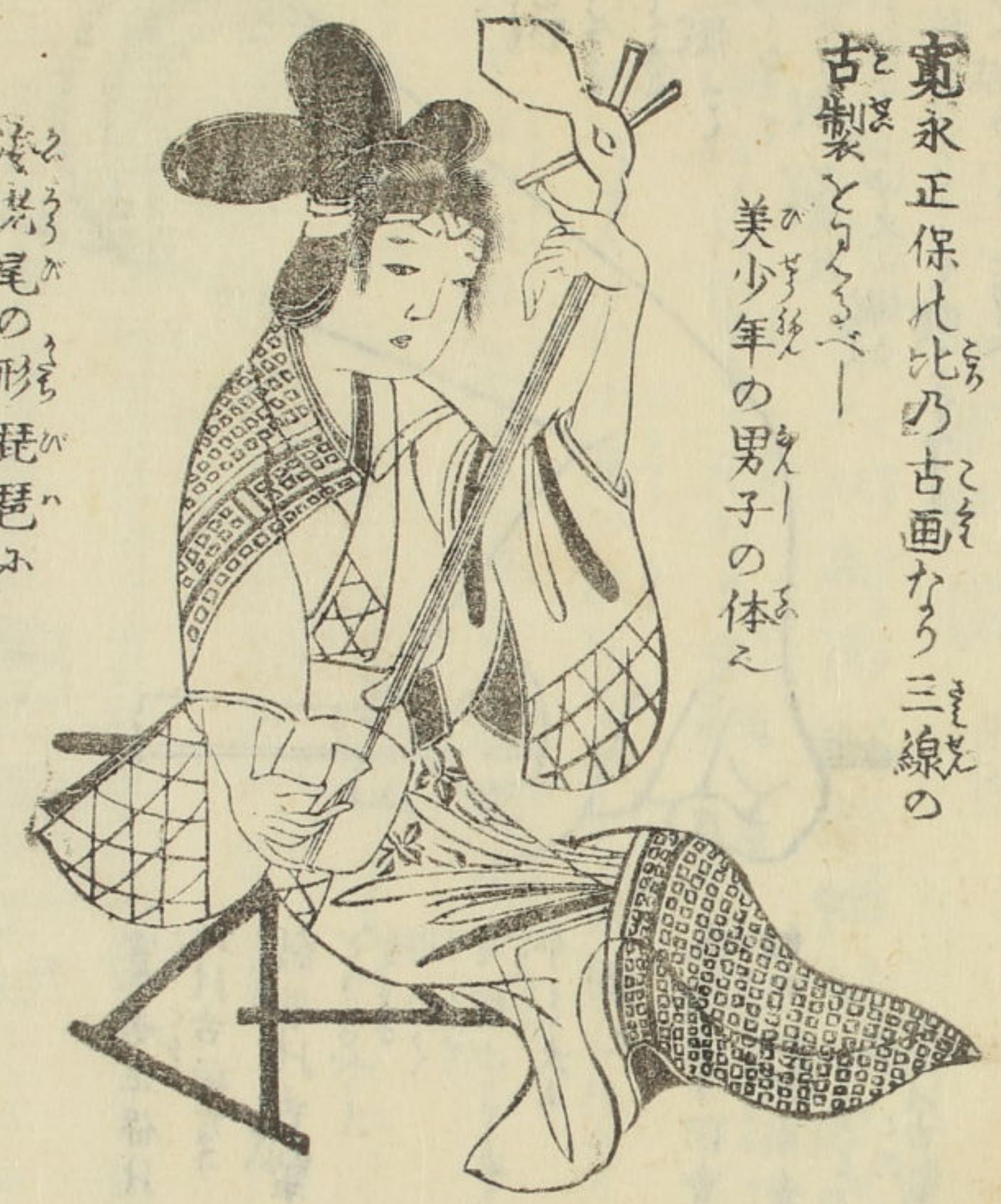
○三線鼓弓れ古製 干五

松れ葉 元禄十 六年板 小。永禄の比琉球より地皮二絃れ樂器と云ふも泉州堺の琵琶法師
中小路より者一絃と云ふて三絃小とせし呼寛永より盛
りてより六十余年なれ古製と存今大異いづれの比ふ古近は
名匠出く今の形ふれりて○鼓弓れ古製も左よ出と云ふ
○元禄の頃主として三線ハ向らひの形も今より異なり
それゆゑ今も元琵琶法師は向らひの形も今より異なり

骨董上編中二十

寛永正保れ比の古画なり三線の古製と云ふ

美少年の男子の体之



淺若尾の形琵琶ふ
初たり今と大異

東山便書 室西

万治年間印本
東海道名所記
所載



万治の比の形

紫足袋とりり用ひたりしるる都風俗鑑延宝九年板 卷之二云「足袋ハ白草にて

紫たびとくくりのへらりと氣のとりりぬ杏花園養本 ありし相落一名女五經 母云「たびと

白かりしむらさきハむらさき」延宝九年板 延宝比比よりりてハ紫足袋やとこれる

かへん〇貞享三年比印本云老女比事とつる紫に「苧桶比とてり」紅の織紐

母一紫比革たび一足つぎくの珠数袋云々西鶴織留 貞享の比の著述正徳二年印本 卷之一云ある老女

母のまが若き時比事と語る紫云「我等もゆらんハ花を深乃りらんきる相細の草一節

こそ姿く作てりある振舞の時も浅紫よりし菊の指比相おらんハの草は比革足袋

こそ花とやりーに云々」延宝九年板 貞享の比よりりてハ紫足袋とくものりかりしおん

我衣ハ足袋の事とつる紫云「寛文の比まで女ハ紫革かてりこそりハ苧桶一白革

浅紫革も有り細い志ら志ゆととらんをふつて一足こそ一年も二年もこれるを以て

より天和の比より木綿比畦さりの足袋とや云々」今彼是と参考とらん紫足袋ハ天文の

比より寛永慶安比比までおんかりりて延宝天和の比よりりてりりりり翁草卷之

骨董上編中六二

五ふ昔ハ男女とも草足袋と用ゆ明曆比後革の價高くかりて木綿足袋と用ゆ
いりまされども寛永九年印本 富る若比事とつる紫云「紫さる比木綿たびと
かひ頭中で頼り云々」延宝九年板 延宝比比も木綿足袋おんかりりり

〇九けりーの文様 十七

慶安より万治寛文比比女の衣服ハ九尽一此文様おんかりりり

山の井 慶安元年刻

秋乃野比母一紫比露也九けりー

崑山集 慶安四年撰明曆二年刻

花くまらるる日新や九けりー 安明

新續天鏡波集

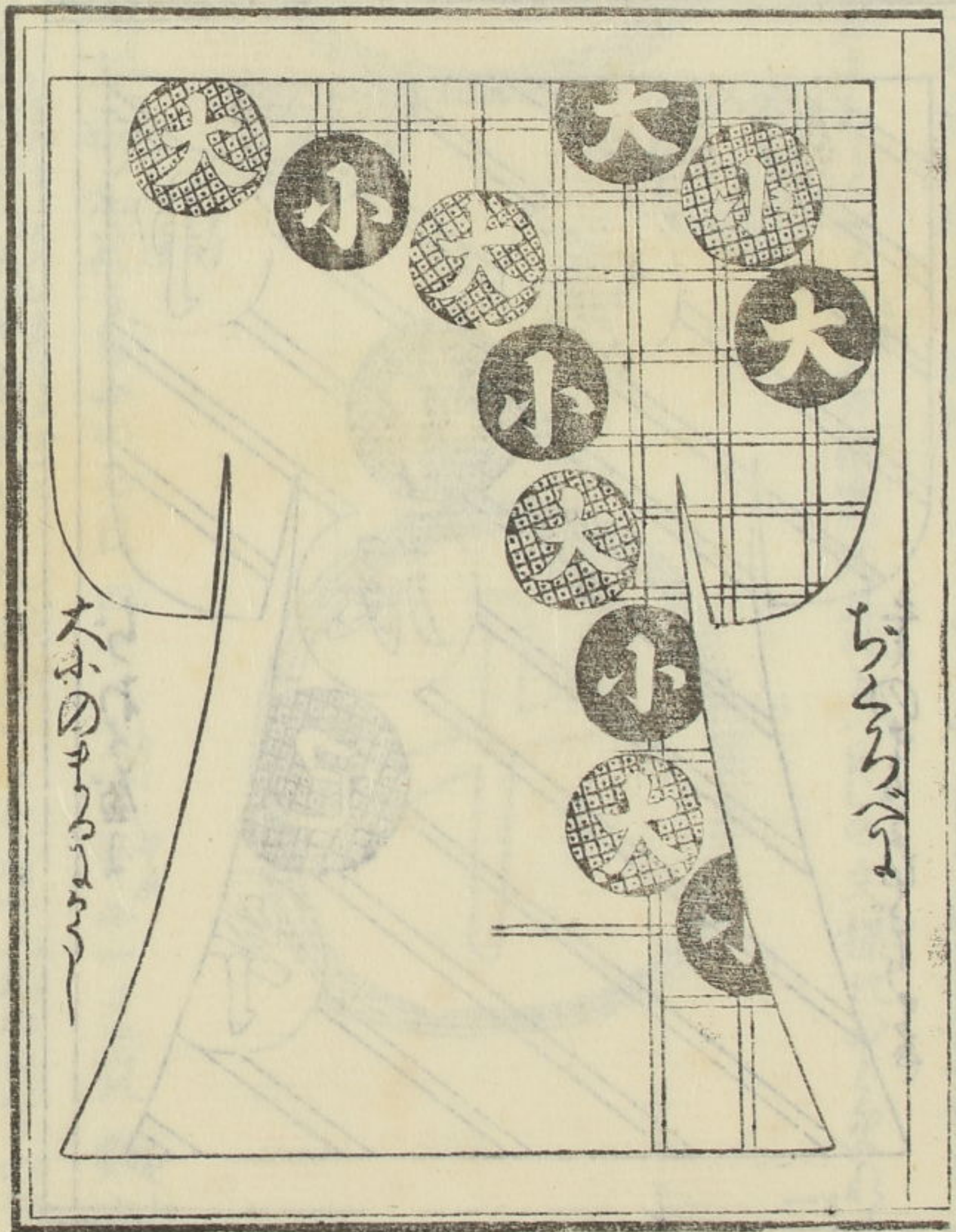
新うつる田毎比月や九けりー 品芝



同書所載

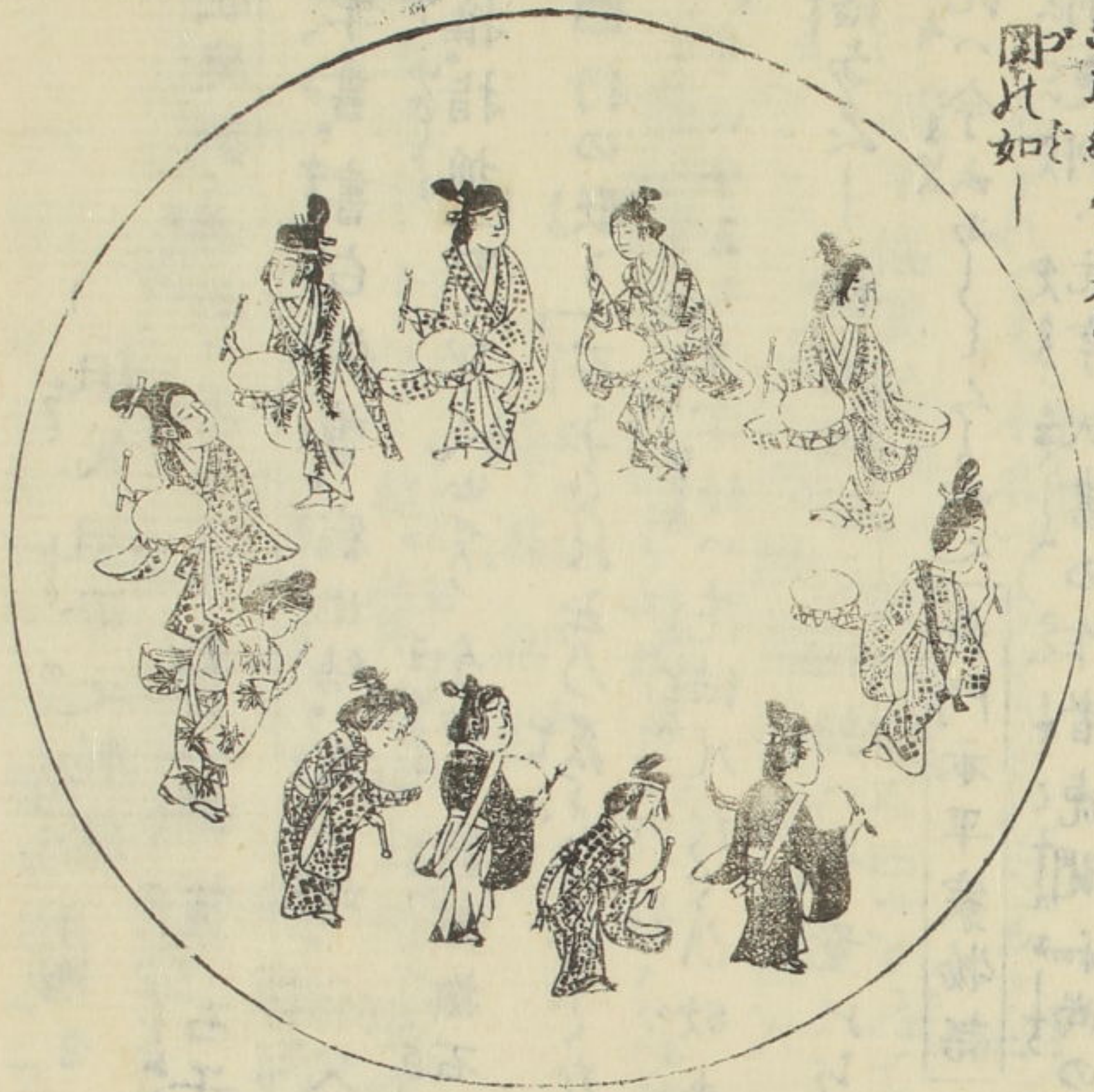
右に阜圍と此雜形と
符合もともとの
の流行と

○天和貞享此の印本
女重宝記といふ物の
一の巻より一友禪係れ
九げく一云く一とあり
これも一證とすべし



題目隔國時繪香合

綴て沃掛地之蓋は面
此繪ありと
即れ如し



按るに是寛永時代れ在るを洛北修学
寺村或へ松崎等これ題目隔の香合とす
庵の題とすなるとは丹前帯とすなり之
松の葉 元禄十卷之一 三絃鳥組此歌
京で一条柳屋の娘四ツ郎帯とたをたふ
かけといふも腰がまがやうか
則是るもこれいふも三絃は本手
組といふもの依作り出せし時れ歌うれ
寛永れ時代ふりより少女のいひ髪と
いれ髪とむとひとらまれとらるる体も
たさやうなり寛永元年より今文化十年
ふいよりておとを百五十年小なり

○祖父祖母之物語 十四

異制度訓

遊戯ユウギ。事コト。一ヒト。振ヒ。聾ソウ。石子イシ。礫打イシウチ。竹馬馳タケウマ。編木摺ヒキ。文字結モノジ。

文字書モノジ。書占モノシ。何曾ナニゾ。宿世結シュクセキ。宿世焼シュクセキヤク。祖父祖母之物語ソコソバノモノガタリ。目比メヒ。頭引カビ。膝挾ヒザカサ。指引サシ。

腕推ウデオシ。指抓サシ。又西行の歌マタセイギノウタ。石イシ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

又西行の歌マタセイギノウタ。石イシ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

縁結エダヒ。祖父祖母之物語ソコソバノモノガタリ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

目比メヒ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

異制度訓イニシドクン。元亨釈書ゲンキョウシャクショの作者ソウシャ。虎関コケン和尚ニョウの作シヤク。庭訓往来テイクンライライより前マエに書カキ。其ソノ来キるルことコト尚ナホ。一ヒト。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

多オホシく考カウへて追書オヒカキも一ヒト。

○辨疑書目録

小。異制度訓イニシドクンの玄惠ゲンエ法印ホフイン作シヤク。元遊ゲンユウ学ガク往来ライライと同本ドウホン。誤アヤマリ。

元禄五年板の書籍目録ゲンロクゴネンイタノショクシヨクモクロク。虎関コケン作シヤク。其故ソノコト。抄セウ。学ガク往来ライライの玄惠ゲンエ。

比作ヒヤク之ノ寛文二年印本カンブンニネンインホン。其文ソノコト。異制度訓イニシドクンと異イナ。或人ワカレタリ云イハ。異制度訓イニシドクン。

といふトイフ。本名ホンナ。いハ。何ナニ。とト。玄惠ゲンエ。比ヒ。度訓往来テイクンライライ。其ソノ来キるルことコト尚ナホ。一ヒト。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

去クれルもモ。本名ホンナ。いハ。何ナニ。とト。玄惠ゲンエ。比ヒ。度訓往来テイクンライライ。其ソノ来キるルことコト尚ナホ。一ヒト。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

○源平盛衰記ゲンヘイセイサイキ。卷クワン之ノ二十四ニジュウヨン。鼓判官石四ウツツバシと作シヤク。一ヒト。二ニと突ツキ。石イシ。子コ。比ヒ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

かろべーカロボー。小大君家集コオホキミイサノカミ。俊頼朝臣トシタカノチノミ。散木集サンキ。石イシ。かカ。らラ。のノ歌ウタ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

童遊ドウユウの考カウ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

○持遊 無木 三十

遊学往来

少性シヤウセイ。推オシ。算サン。被ヒ。強木キヤウキ。摺シ。礫打イシウチ。獨樂地ドツラクチ。拍毬ハクキ。石イシ。子コ。比ヒ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

小白シラホ。抽ヒキ。竹タケ。子コ。葉ハ。新ニ。小車コクルマ。摺シ。威イ。為ニ。法ホウ。業ゴウ。送ソウ。形カタルシ。終ハヤシ。能ノ。老ロウ。今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

今按イマアヒ。鼓ウタ。鼓ウタ。擲石ウチイシ。和名鈔ワナシ。

手向うが前ゆく。七夕み手向うが後ら。とまんりくまね古き事あり。

○奈良の庭竈 三十三

世間胸算用 元禄五年印本 卷之四云。正月奈良中の家くふをいりて。釜を焼火して。

煮不敷物してその家内は下人もむらみ樂居して。不めの居買の委しく。平乃

かうりして。煮み入る丸餅と。煮火を焼喰い中らるん云々。しんえり。とまんりく

昔の庭竈は考へれりべし。これ前ふり地火炉の遺風なり。

○元禄二年の夕

てんきおのりてこれの御製のゆりて死とふりか

庭慮ふて修下氏や庭竈

芭蕉

五元集拾遺

庭竈牛と雜煮と居りたり

其角

瓶木のぬも何とて庭竈は奈良のふりて。蓋奈良其原をやりん

○江戸吉原ふ今も正月を焼火し。これ前より。これふまじく附會の説と云々。実ハ

庭竈は遺風なり。昔むかひ様とはふ奈良の庭竈乃ちふりて。元吉原の

骨董上編 中九八

比より傳へる。庭竈なり。今ハ庭竈焼火と云々の

○長崎柱餅并辛木 二十四

世間胸算用 卷之四。長崎の年々暮の末と云々。糸小「餅ハ其家くの嘉餅なり

と云つて。樹をとりて仕舞ふ一と大く柱をうらつけて。正月十五日は左義

長のとれと何ぞして祝ひ多。庭竈幸ハ木とて横にうらふと。餅はつと串貝

層危稚子。あひの爐餅赤い。昆布餅。餅牛。餅大根。三が日ふつふか。料理乃

りの。此本ふつりきけて庭竈とみさり。とて大ぬ日。夜ふ入れた。和りひと。と

まて。とてつら。とて大く。又。庭竈。當年は。元禄年中は

家くといふ。庭竈。一は。とて。しんえり。これ元禄年中は

茅之長崎は。問ふ。此柱餅は。遺風今も有り。餅と延命袋の形ふつら。天黒

柱ふ打つけて。庭竈。とて。落る。とて。わら。とて。

○宗祇の蚊帳 三十五

今の言のつらさ。さうからの中うあるもの。義多うん。いふ人の通例のこと。今の言のつらさ。さうからの中うあるもの。義多うん。いふ人の通例のこと。今の言のつらさ。さうからの中うあるもの。義多うん。いふ人の通例のこと。

印本今昔物語

忠明云々の條に「大明いり。火燧乃灰をかち取集めまに」とあれど「印本」の火燧の字あり。印本ふあゝ後のさうらら。印本のまをまて。

こたつの名いふやう。とみありひまがひそ。

○前の火燧の考の因に地火炉の事をいふ引りてをさうま。

續古事談

「一条院の御時臺盤所よて地火炉はいひてと云事あり云」と

榮花物語

玉のうくあゝの巻に「市厨子所の御をさへれば云。又たのつとあけたる

新撰字鏡

「爐」の字の訓火呂とわればちひスハ地炉といふが如し。とにわくに近

世の庭竈

地火炉の事い外もあゝのふりれど。もたぶ。とあゝりたるまに。にわたりかまらる。

骨董上編 中巻追加一

○右に引る中古近古の書ども。假字のころえぬもかわれど。その

まうにあらう。けもつらう。意をあらひ。古書のまを失ふ。あひひざれば。又字音のわかれが。言も假字のたふる。かわめる。いりよせん。他よあつて。あせつれば。あをあらたけに。あゆび。又字を。あまもあゝる。○是等のあひま。あゝる。べた。とあゝ。凡例よつづら。れど。ま。板。彫。さ。の。つ。と。書。賈。前。快。二。巻。を。と。き。よ。弘。ん。と。と。い。い。ま。ね。れ。ば。む。じ。と。を。得。と。後。快。の。巻。首。に。載。べ。く。あ。り。り。ま。じ。ん。次。の。正。一。あ。ら。う。を。な。り。あ。り。と。

後快目錄

下之巻前

- 一 毬杖考 打毬樂圖古製
- 二 毬杖考 今毬杖圖
- 三 羽子板考 北越の祝木の図
- 四 粥杖考 羽列のあはけ棒の図
- 五 乳母日傘とあひ諺の原

奥と
つと
毛詩
の注又
夫本抄
よ考
野あり

三 菅浦曹再考。園本曆より前并内侍日記より。粉の看板再考。日蓮御書より。湯後とのみことあり。諸君の証をかりてのこたり。かこむ草

五 錢湯風呂再考。諸君の証をかりてのこたり。かこむ草

六 石榴風呂鏡磨再考。諸君の証をかりてのこたり。かこむ草

七 伊勢の風呂吹再考。引りてのこたり。かこむ草

八 帯再考。衣服令義解 諸君の証をかりてのこたり。かこむ草

九 豆腐をぬぐりの言。上臈名事 七十一番 職人尺より

十 提灯行灯再考。蓋農鈔 その外引りてのこたり。かこむ草

十一 蠟燭再考。諸君の証をかりてのこたり。かこむ草

十二 貞を斗こと云言の再考。貞徳文集 新續犬つが集 おこ

十三 伏編笠名義。考証

十四 桔梗笠淺葱椀。引りてのこたり。かこむ草

十五 浮世御聖再考。和訓栞 ようきこのほほ蓄あうと

十六 衡重食籠再考。考へかたがら又

十七 硬蓋再考。今昔和流より硬蓋より肴の交菓子を取りたる事うんあうれども民間

十八 異制庭訓年歴考。い谷中より天竜寺の居あり

十九 無木といつる物の再考。干訓抄 塩漬のこたりありてのこたり。かこむ草

二十 一二の再考。前より一二のたがひありてのこたり。かこむ草

二十一 根本雜事再考。此經の本名の根本説一切有部毗奈耶雜事と云

二十二 卷第十六小猕猴技果の事ありて佛與天受の語あり。義楚六帖 大よ

二十三 畧文より異同ありゆゑ小これをとらざ

以上後帙二冊来乙亥春發行

前帙二卷の引昏ありてのこたり。かこむ草

物よりそのこたりのうちものまゝとて事まゝるめれば当時を考るたつた

あきまのこたりのうちものまゝとて事まゝるめれば当時を考るたつた

後帙二卷の引昏ありてのこたり。かこむ草

骨董上編中巻追加三

小引のめりどりづくに越杖がまゝに彌杖離遊考の引書をたよ奉て
 前帙二巻と趣の異あるをまゝにむ。但書籍の年序のめりどり引
 用する次よまゝにひてあるせり。

▲越杖めぐりの考引書

- 萬葉集
- 事物紀原
- 源平盛衰記
- 袖中抄
- 遊学往來
- 下学集
- 壺裏鈔
- 本草啓蒙
- 續日本後紀
- 遼史
- 平家物語
- 日本歳時記
- 訓蒙圖彙
- 世諺問答
- 和漢三才圖會
- 三才圖會
- 和名鈔
- うつほの物語
- 義經記
- はれく草
- 源氏物語
- 中山傳信錄
- 滑稽雜談
- 年中定例記

骨董上編 十卷 以上

▲彌杖考引書

- 清少納言草紙
- 増鏡
- 日次紀事
- 年中故事要言
- 和名鈔
- 日本紀
- 古事記傳
- 源氏物語
- 秋衣
- 紫式部日記
- 下紙
- 日本風土記
- 和訓栞
- 契沖雜記
- 釋日本紀
- 齊宮女御集
- うつほの物語
- ごま抄(ぼや)
- 清少納言草紙
- 并内侍日記
- 日本歳時記
- 婦人養草
- 簾中舊記
- 玉かほま
- 厚顔抄
- 中務集
- 榮花物語
- 増鏡
- 濱松中納言物語

▲離遊考引書

- 和名鈔
- 日本紀
- 古事記傳
- 源氏物語
- 秋衣
- 紫式部日記
- 日本風土記
- 和訓栞
- 契沖雜記
- 釋日本紀
- 齊宮女御集
- うつほの物語
- ごま抄(ぼや)
- 清少納言草紙
- 并内侍日記
- 日本歳時記
- 婦人養草
- 簾中舊記
- 玉かほま
- 厚顔抄
- 中務集
- 榮花物語
- 増鏡
- 濱松中納言物語

- あけろの日記
- 離遊記
- 古事記
- 壺囊鈔
- 拾芥抄
- 世諺問答
- 無言抄
- 御傘
- 増山の井
- 加茂保憲女集
- 国朝佳節録
- 文昌雜録
- 名物六帖
- 雍州府志
- 五元集
- 鋸屑
- 其袋
- 續猿蓑
- 土左日記
- 日本歳時記
- 女用訓蒙図彙
- 諸国奇遊談
- 昔二物語
- 本朝食鑑
- 滑稽雜談
- 五元集拾遺
- 朱ひくさき
- 和漢三才図會
- 春曙抄
- 異本和泉式部集
- 丹後守為忠家百首
- 婦人養草
- 羊中風俗考
- 女用花鳥文章
- 江家次第
- 日本紀通證以上五十四種

骨董上編中巻追加五

